

夢へのいざない

平成5年8月24日～9月24日

古来、人間は夢に大きな関心を抱いてきました。時には神秘的な啓示として、時には精神分析の格好の対象として、夢は記録され、さまざまな分析や解釈がそこに加えられ、無数の物語の源泉となってきました。その一方で、夢を正確に筆記し、分析や解釈を差し挟まず、そこに現れる奇怪なイメージや歪んだ関係性をありのままに表現しようとする試みも、画家や作家の関心をひきつけ続けています。

今回の常設展示では、夢日記や夢の世界を描いた小説を中心に、記録された夢の数々をご紹介します。人間によって「生け捕り」にされた夢のひとつひとつが、読者を、未知でありながらどこか懐かしい、夢の世界へといざなうでしょう。

1. 笑う月

安部公房著

東京 新潮社 1984 141p

<KH31-18>

笑いながら「僕」のあとを追いかけてくる月や、火をつけられて燃え上がる仔象など、夢のイメージの充溢する短編・エッセイ集。『砂の女』や『密会』などの小説で、非現実の世界をリアルに描き出してみせた安部公房が、夢の論理を追求する

2. 私の夢日記

横尾忠則著

東京 角川書店 1979 265p

<KH734-129>

「二人の宇宙人が空間を泳いでいるので、ぼくは自分が海底に立っているような錯覚を覚えた」(1976年1月30日「黄金の都市と悪魔」より)国際的に活躍するグラフィック・デザイナー、横尾忠則の夢には、UFOや神仏のイメージが繰り返し登場する

3. チューリヒ夢日記

秋山さと子著

東京 筑摩書房 1985 237p

<SB267-44>

「右手の木陰から、角をはやしたいぼだらけの怪獣のようななめくじが這いだした。これに対抗するように、左手から、背中に一条の黄金の筋のある、真黄色なかまきりが出てきてなめくじに向かって前翅をふりあげた」(1965年2月26日)心理学者秋山さと子が、4年間のヨーロッパ滞在の思い出を、その時々に見た夢を交えて綴る

4. 夢日記

島尾敏雄著

東京 河出書房新社 1978 223p

<KH555-370>

「遂に特攻戦が発動された。一同船艇に乗せられて出発！いよいよ突っ込んで死んでしまうのか。隊は四箇隊のようでもあり又二箇隊のようでもあつた」(昭和50年2月4日)戦後の代表的作家の一人である島尾敏雄は、戦争体験や妻との葛藤を小説化するかたわら、『夢の中での日常』などの作品で夢の世界に固執し続けた

5. ことばの食卓

武田百合子著 野中ユリ画

東京 作品社 1984 141p

<KH589-529>

誰もいない草原にとり残された私に、一匹の羊が語りかける。「裏切ったではありません。あなたのことをいつも思っていたのだけれど、なかなか、ここまでは来られなかったのです」羊を撫でる私の目に、次第に涙がたまってくる(「十二月の或る日」より)。エッセイストの武田百合子を書きとめた8つの夢『夢、覚え書き』を収録

6. 夢日記

正木ひろし著

東京 大陸書房 1974 350p

<GK79-22>

「姿なき人は、私に蓋のない懐中時計をくれた。よく見ると、時計の面が地図のようになっていて、四時から七時のある部分が、色が濃く(ダークグリーン?)なっていて、そこに平仮名で『ペリペロっと』と記入してあった」(1971年1月11日)チャタレイ夫人裁判や菅生事件、八海事件などの弁護で知られる弁護士、正木ひろしが記録した膨大な夢のうち、約370篇を収録

7. 夢を植える

清岡卓行著

東京 講談社 1976 190p

<KH271-270>

「ああ、賑やかな町のなかで、私はまたはだしだ。どうして靴を履くのを忘れてきたのだろう？おまけに、靴下までしていない。鏡のように滑らかできれいな、この敷石の歩道のうえ……」(「町の中ではだし」より)詩人・作家の清岡卓行による、夢を母体にした掌編小説集

